50. TBG radioimmunoassay kit (CIS) の基礎的ならびに臨床的検討

今村理喜代
(天理よろづ・RI)
吉政　康直　浜田　哲
(同・内分泌)

TBG は，甲状腺ホルモンの主要な担体蛋白であるが，その測定は困難であったため，従来最大ホルモン結合能が測定されていた．今回われわれは，抗 TBG 抗体をセルロース粉末に結合させた一抗体法による TBG-RIA キットを用いてその基礎的検討および，臨床的応用を試みた．

成績　I) 基礎的検討　(1) インキュベーション時間：4時間で B/Bo% の減少がみられた．(2) 希釈試験：4倍希釈まで計算値とよく一致した．(3) 回収率試験：平均回収率 97.4% と良好．(4) 再現性：intra-assay (C.V.) 4.52%，7.59%，Inter-assay 7.48%，5.73%．

II) 臨床的検討　(1) 正常人の TBG 値は 1.62 ±0.25 mg/100 m*l* で男女間に差はなかった．(2) 甲状腺機能亢進症は正常人との差はなく，甲状腺機能低下症で有意の高値，妊娠中期，後期で著しい高値を示した．先天性 TBG 欠損症では測定不能であった．(3) T_4 と TBG の分散図で，妊娠群と甲状腺機能亢進群は区別された．(4) TBG と T_3U との間には良好な負の相関がみられた．(5) 正常人の T_4/TBG 比は 3.5～7.6 で，甲状腺機能亢進症や甲状腺機能低下症との間に重なり合いはなかった．しかし妊娠中期，後期では有意の低値を示した．

結語　本キットは，測定が簡便で少量の試料で測定可能な上，基礎的検討の成績も良好で，臨床的応用も可能であり，日常検査として十分使用に耐えらえるものである．

51. TBG radioimmunoassay kit (CIS) の検討

梶田　芳弘　八谷　孝
吉村　学　伊地知浜夫
(京都府立医大・2内)
宮崎　忠芳
(同・臨検)
越智　幸男
(滋賀医大・2内)

固相法を用いる CIS 社製 TBG-radioimmunoassay (RIA) kit の基礎的臨床的検討を行なった．標準曲線は異なるロットでもほぼ同様の結果が得られ，測定は室温でよく保生時間は3時間が適当と考えられた．高濃度 TBG 血清を測定感度以下を示した家族性 TBG-deficiency 血清および蒸留水で希釈しても，標準曲線と類似の希釈曲線が得られた．正常ヒト血清および低濃度 TBG 血清に標準 TBG 液の添加により得られる回収率もよく，intraassay および interassay variation の検討からも良好な結果が得られた．正常者の血清 TBG 値は 19.2±3.8 (mean±S.D.) μg/m*l* で，甲状腺機能亢進症で若干高値を示した．diphenylhydantion, glucocorticoid 投与例では正常範囲内にあった．家族性 TBG-deficiency の患者は 5.2 μg/m*l* 以下と低値で，男子患者は全例感度以下であり，X-chromsome dominant な遺伝型式に一致した．さらに本症と Graves 病の合併例では TBG-RIA の有用性は高い．また PEG 法を用いるヘキスト社製 kit と本 kit の相関はよく，本 kit の日常臨床検査法としての有用性を確認し得た．

Presented by Medical*Online